

職人の支援と文化遺産の保護

——インドにおける手工芸開発の変遷

中谷純江

I はじめに

本稿では、インドの手工芸開発の歴史を、実際に開発に携わった人々に焦点をあてて描き出すことを試みる。個人に焦点をあてるのは、開発は実体として存在するのではなく、手工芸開発に携わった人と手工芸生産者との個人的な関わりのなかで実践されてきたものである、という金谷の視点（金谷 2007: 38）を共有するためであり、ある特定個人がある時代の政治経済的状况において、どのように手工芸開発に携わったかを明らかにしたいと考えるためである。

る。また、政府の手工芸政策において重要な役割を果たしたと思われる人物を取り上げるのは、政府の方針や施策の変化がインド社会の変動とどのように結びついているのかを考察することに本稿の目的を限定するためである。^{*1}

以下では、まずⅡで、独立以前のインド社会における「職人」の状況について述べ、インドにおける手工芸の「伝統」がどのように形成されたのかを示す。また、「職人」にも、農業を中心に統合された村落社会のなかで生産する人々から、地域を越えた広い範囲の交易ネットワークのなかで生産する人々までさまざまなであり、必ずしも一括りに論じられないこと、しかし同時に彼らは互いに区別される異なる集団ではないことを述べる。こうした「職人」カテ

ゴリーの多様性と包摂性は、次に述べる手工芸開発の対象となる人々の問題に直接かわわっている。Ⅲにおいては、

独立後のインド政府の経済政策のなかで、手工芸がどのような位置を占めたのかを述べる。ここでは、植民地支配や近代化を通して生計の手段を失った職人への生活支援として政府の手工芸開発が始まったこと、それが後に、国の文化遺産である優れた技術の保護という方向へ転換したことを述べる。手工芸開発における方針や施策の変化は、おのずと手工芸開発の対象となる人の変化につながっている。

Ⅳでは、インドにおける手工芸開発の歴史を三つの時期に分け、各時期に手工芸開発に関わる政府の重要なポストを担った人々について記述する。彼らが行った施策の特徴から、第一期を手工芸開発の基盤が築かれた時期、第二期をインドの手工芸の海外展開が進められた時期、そして第三期を国の経済成長を背景に、国内市場が成長した時期として捉える。最後に、Ⅴにおいては、本稿でとりあげた人々の考え方や仕事を、インド社会の政治経済的コンテクストに位置づけて考察する。なかでも、筆者が長年交流をつづけてきたブリッジ・ブーシャン・バシン (Brij Brushan Basin, 1940-)*²とこう一人の人物が果たした役割、彼の仕事の特徴についてまとめ、彼の仕事もまた職人への支援と文化遺産の保護、つまり「人」の開発と「モノ」の開発というインド手工芸開発が抱えた二つのテーマの間で揺れて

きたことを述べる。

Ⅱ 独立以前のインドにおける職人

インドでは、明確な社会集団として「職人」が出現したのは、おそらく定住農業の開始と同時期、紀元前六千年までさかのぼる。紀元前二六〇〇年頃に栄えたインダス文明の遺構、モヘンジョダロやハラッパからは、たくさんの陶器や青銅品、人形、ビーズや金銀の装飾品などが発見されており、綿を紡ぐ技術や織る技術があったことが証明されている。また、印章や秤も見つかっており、さまざまな品物が遠くはペルシャやメソポタミア地域まで交易されていたと考えられている。しかし、紀元前一八〇〇年頃、アリア人の侵入によって都市的なハラッパ文明が減じると、職人の技術も衰退した。その後、ヴェーダ時代には、ガンジス平原やデカン高原を中心に、牧畜を基本とする村落社会が築かれた。

ふたたび、職人の活躍が顕著になるのは、紀元前三〇〇年頃に北インドのマガダ国に興ったマウリヤ朝期である。強い政治権力は、富を集積させ、都市を発展させた。富は交易に投資され、村々を市場につなげる交易路が確立された。この時期に交易品を生産する職人たちは、社会におい

て重要な位置を占めるようになり、融資機能を備えた職人組合が^{*3}つくれた。また、この時代の特徴として、交易路の戦略的地点には、仏教僧院が³つくれられ、建築費や維持費として、職人や商人による多額の寄付が行われていた。こうした事実は、「職人商人」(Artisan-merchant)の存在²、彼らが経済力を背景にかなりの政治権力を持っていたことを示す。しかし、レイによれば、三世紀にローマ帝国が衰退すると、地中海市場が縮小し、交易は衰退した。その結果、交易都市は見捨てられた。グプタ朝時代には、農業経済が支配的になり、社会の封建化が進んだ。工芸品の生産は下降し、職人は地縁に基づくカースト制度に縛られるようになった (Ray cited in Sruti 1995: 2)。

農業経済を基盤とした村落社会で職人の生産を支えたのは、「ジャジマニー制度」として知られる社会システムである。土地を支配する農業カーストと職人カーストの間で、サービスやモノの授受関係が世襲的に結ばれていた。たとえば、壺作り職人は、農民のために土製の壺を作る。鍛冶屋は鎌を作り、定期的に研ぐサービスもする。木工職人は農具の持ち手を作り、修理を行う。職人は一年を通じて農民のための仕事をし、報酬として収穫期に一定量の穀物を受けとった。両者の関係については、互酬性に基づく調和的なものであるとする見解から、経済的搾取のシステムであるという見解までさまざまである。いずれにせよ、

ジャジマニー関係が両者の社会的地位の格差を前提にしていたことは疑う余地がない。しかし、バトロンである農民世帯と職人との関係は、親から子へと世襲されたので、専門職人たちに安定した生計を保証し、技術を伝承する機能を果たしていた。

北インドが比較的早い時期から農業社会として収斂していったのに対し、南インドでは、中世において農業を基盤とする集団と、職人商人の集団が拮抗していた。^{*4}マインズによれば、南インドにおいては、一一世紀から一三世紀頃に、職人カーストが手工芸の生産と交易の両方に携わる「職人商人」として、強大な権力を持っていた。彼らは、交易の安全を守るための軍隊や交易の利益を運営する大きな組合を所有していた (Hall 1980 cited in Mines 1984)。ナードゥーとよばれる地域ごとにナガラムという市場があり、職人商人によって運営されていた。武装して移動する職人商人たちが各ナードゥーを結びつけていた。こうした職人商人の組合には、ヒエラルキーはなかった。地位や名誉や安全性といった国家から得られる利益と、国家から受ける管理や税という不利益とのバランスをとりながら自立的に活動していた。しかし、ヴィジャヤナガル朝期(一三五〇―一六五〇)になると、職人商人の組合は軍隊を持たなくなった。組合はマーケティングのネットワークへと形をかえ、商売の安全が確保される一方で、生産物と交易に対す

る国の課税システムに組み込まれていた (Mines 1984: 86)。

北インドでは、一六世紀のムガルの支配下で職人の活動は盛況をきわめ、専門化が進んだ。支配者の後援をうけて、とくに、染織や装飾品や建築の技術が成熟した。インドの染織品は、古くからの西アジアやアフリカ市場にくわえ、ヨーロッパにも輸出されるようになった。しかし、一八世紀になると、ムガル帝国の崩壊によって、各地の在地勢力が力を強めた。中央集権の弱体化は、資源の流れに影響を与え、この時期に多くの職人がデリーから地方の町や村へ移住した。専門技術を持つ職人が集まることで、地方に大きな産業が成長し、市場向けの生産が行われた。最初、ヨーロッパの会社は、産地から直接買いつけていたが、一八世紀中頃までには、貿易拠点が形成され、そこに職人や豊かな消費者が集まるようになった。

村落の職人と都市の職人とは、カーストや商売のネットワークを通して結びついていた。たとえば、インド西部には、モチとよばれる職人カーストがいる。彼らは高度なチェーン・ステッチの技術を持つことで知られ、多くの刺繍職人を輩出してきた。ムガル宮廷の工房で働く職人から、地方領主のお抱え職人、輸出用の刺繍を行う職人、寺院に奉納する刺繍をする職人、村落で農業カーストのために刺繍をする職人など、彼らはさまざまなレベルのパ

ترونをもち、その庇護下で互いに切磋琢磨し、刺繍技術をみがいてきた。このような事例は、パترونと職人との間の関係が、必ずしも村落社会内部で閉鎖的に機能していたものではないことを示している。さらに、一九世紀のマハラシュトラやグジャラートの研究は、村落を基盤とするジャジマニー関係もまた、村落社会における生存のための生産と商品生産の両方を兼ね備えた非常にフレキシブルなものであったことを明らかにしている。同じ職人が村落社会のなかで穀物と交換するための自給自足的な生産と市場に売るための生産に従事していた (Alavi 1984: 317)。つまり、村落を生産の拠点とする職人も、地域の交易ネットワークにつながっていたことがわかる。

しかし、一九世紀になると植民地政策下で、大量の工業製品がイギリスからインドに入ってくるようになった。インド製品の輸出を阻む保護関税の措置がとられ、インドはイギリスへの原料供給地となり、莫大な富の流出がおきた。イギリス綿製品の流入によって、とくに手織産業が大きな打撃をうけた。しかし、柳沢によれば、手紡糸業のように衰退が著しかった分野がある一方で、高級な手織物業は直接的な打撃をうけなかった。たとえば、一九世紀から二〇世紀の南インドでは、手織機数の増大が見られた (Decker 1989 cited in 柳沢 1992)。また、一九二〇年代以降には、インド国内の工場制綿工業の発展に対応するために、手織

業は製品を高番手化・高級品化し、遠隔地市場向け生産に特化することで生き延びた。それにもなつて手織職人に対する商人による問屋制支配が拡大した（柳沢 1993）。これらの指摘は、比較的平等なかつての職人商人ネットワークが、親方や商人という企業家職人と職工労働者へと分解したことを意味しており、それは手織機の小規模手織工場への再編過程として捉えることができる。注目すべきは、イギリス製品の流入によつて直接の打撃をうけなかった分野においても、織物工の賃金が大幅に減少したことは確かであると柳沢が論じている点である（柳沢 1993: 103）。イギリス製品との直接の競合によつて働く場を失った職人だけでなく、手織工場という新しい展開に含まれた職人もまた貧困化していた。

一方、農村部においては、商品経済が浸透し、安価な工業品が市場で手に入るようになり、ジャジマーニー関係が徐々に失われていった。農民たちは壺や農具を職人から直接、購入する必要がなくなった。また、収穫物をパトロンとして職人たちに分配するかわりに、マーケットに売って現金にかえるようになった。近代化や産業化が進むなか、職人が専門技術によつて生活することが難しくなり、多くの者は伝統的な仕事をやめた。しかし、職人カーストはシェードラ層や不可蝕民に属しており、農村で経済基盤となる土地を持たない者が多い。大部分の者は、他に生計を

たてる手段がみつからないまま困窮化していった。

Ⅲ 独立インドの経済政策における 手工芸の位置

インドは、一九四七年にイギリスから独立を果たし、独立運動を指導した国民会議派のメンバーを中心に新しい政府が樹立された。ジャワハルラール・ネルーが初代首相に就任し、社会主義的な経済路線が採用された。上述したように、植民地下の経済構造において、国内産業は著しく衰退していた。鉄鋼や機械や電気など基幹産業を自国で発展させることが最重要の課題とされた。しかし、一方では、手仕事が近代産業に置き換えられていくなかで、生計手段を失った大量の職人の生活を安定させる必要があった。

新政府は経済発展の基盤となる重化学工業の育成と近代的技术から取り残された職人の救済という二つの課題への対応に迫られていた。このことは、最初の経済政策として示された一九四八年の産業政策決議（Industrial Policy Resolution）にも表れている。そこでは、近代産業への大規模な投資の必要性和ともに、地域の資源を有効に活用できる小規模の家内生産の重要性が認められている。小規模セクターを擁護する理由として、投資に対する効果の高さ

があげられている。小規模セクターに必要とされる資本は大規模産業のおよそ三分の一であること、小規模セクターの方がより多くの雇用機会を生み出せること、国家の収入をより平等に分配できることが指摘されている。決議では、大規模産業との競争から小規模セクターを保護する措置がとられる必要があることも認められ、この決議の概要は、第一次五カ年計画（一九五一～一九五六年）に盛り込まれた（Sruiti 1995: 20）。

インド政府による手工芸開発は、その出発点においては、職人の生活支援をその目的とし、手工芸セクターを村落産業（village industry）や家内産業（cottage industry）という名でひとつの開発分野に位置づけた。こうした政策には、インド独立運動を主導したマハトマー・ガンディーによる「カーディー（手紡手織布）」奨励と「村落共同体」復興の理想が受け継がれていた。村落産業の育成によって深刻な農村疲弊や失業問題の解決を図るとともに、社会的平等を達成するという意図が含まれていた。しかし、手工芸セクターの振興に対する政府のコミットメントは、必ずしも十分ではなかった（Panandiker & Sud 1986 cited in Sruiti 1995）。

第二次五カ年計画（一九五六～一九六一年）になると、伝統的村落産業から近代的小規模工業政策への重点の移行がみられるようになる。第三次（一九六一～一九六八

年）、第四次（一九六八～一九七三年）、第五次（一九七三～一九八〇年）の各五カ年計画では、産業の分散化という点から、農村地域における小規模産業の育成（農村の工業化）が重視されるようになった。こうして手工芸の分野は、経済開発の主流からはずれていった。また、手工芸開発自体においても、強調点はしだいに職人の生活支援から技術促進やマーケティング支援へと移っていった。こうした流れは、「優れた」手工芸を生産できない人々、職人のなかでも最貧困層にあたる人々への支援の引き上げを意味していた。

一九七七年にジャナタ党が国民会議派の長期政権を覆し、初の非会議派政府が樹立された。このとき示された新しい産業政策では、近代化政策の見直しのなかで、伝統的村落産業の再評価が行われた。「小規模セクターで生産できるものは、必ずそこで生産しなければならない」とされ、村落産業に確保された商品リストの拡大、都市産業への規制、村落産業を促進するセンターの設立などが政策として提出された。政府の手工芸セクター重視の姿勢は、第六次五カ年計画（一九八〇～一九八五年）のドラフトにも表れていたが、一九八〇年に国民会議派が政権復帰をはたした後は、何の対策もなされず、ジャナタ政府が提出した産業政策の方向から逸脱していった。

第七次五カ年計画（一九八五～一九九〇年）になると、

小規模セクターの振興は、国のクラフツマンシップや芸術遺産を保護するために必要であるという方向に転換し、生産性や品質を改善するための対策が重視されるようになった。そして、最後となった第八次五カ年計画では、手工業セクターから獲得される外貨を増大させる必要性が強調された。一九九一年の経済自由化以降は、手工業の分野にも民間資本が流入した。急速な経済成長とともに、豊かな中間層が大規模に出現すると、手工業の国内需要も伸びていった。

IV 手工芸開発を支えた人々

手工芸開発の歴史は、大きく三つの時期に分けることができる。と筆者は考えている。この章では、それぞれの時期にインド政府の手工芸開発に直接かわり、開発を動かしてきた人物に注目する。第一期には、「手工芸の生みの母」とよばれたカマラデーヴィー・チャットパディヤーエ (Kamaladevi Chattopadhyay, 1903-1988) を、第二期は「手工芸の女王」とよばれたプープル・ジャヤカール (Pupul Jayakar, 1915-1997) を取り上げる。そして、第三期の前半に政府の手工芸開発を率いた人物がバシンである。

第一期は、独立直後から一九六〇年代中頃まで、手工芸

開発の基礎がつけられた時期である。この時期の手工芸開発を主導した人物は、カマラデーヴィーである。カマラデーヴィーは、ガンディーやジャヤプラカーシユ・ナラヤンとともに独立運動を戦った社会活動家の一人であり、全インド女性会議の議長をつとめたこともある。インド独立後は、印パの分離によって大量に流入した難民たちの生活再建のための活動に従事した。当時、難民キャンプの責任者であったエル・シー・ジャイン (J.C. Jain) によれば、ある日、難民の救済キャンプを視察した彼女は、食堂や学校や保健施設などを見た後、「これらはすべてすばらしいですね。しかし、彼らの未来はどうなっていますか?」と疑問を投げつけた。そして、翌日には同志を集めてミーティングを開き、難民が彼らの未来を設計する手伝いをすることを決議した。そして、カマラデーヴィーを代表とするインド協同組合が設立された (Jain 2003)。難民の多くは農民だったので、カマラデーヴィーはファリダーバードに土地を確保し、彼らに農地を提供するプロジェクトを行った。また、女性たちが高度な刺繍技術を持っているのを見ると、現金収入を得るためにその技術を生かす試みを行った。女性たちは団結してローンを組み、材料やミシンを調達した。カマラデーヴィーは、都市の生活にあわせてクッションカバーやテーブルクロスなどを作るように薦め、女性たちが作ったものを販売することに成功した。最

初は、パンデイト・ブラザーズという店の一角に商品をおかせてもらってのスタートであったが、一年以内に自分たちの店を持つまでに発展し、注目をあつめた。

一方、政府が職人の支援、マーケティングの確保を目的に一九四八年にデリーの目抜き通りのジャヌパトに設立した中央家内産業公社 (Central Cottage Industry Corporation)[※]の直営店 (エンポリウム) は、売り上げを伸ばすことができなかった。このためネルーは、中央家内産業公社のエンポリウムの運営をカマラデーヴィーに委ねた。こうして協同組合が担っていた難民女性たちの手仕事の支援と、政府が取り組んでいた職人たちの支援がひとつに合流した。ここにインド手工芸開発の大きな特徴がある。金谷によれば、日本や欧米では、女性の針仕事は単に家庭内の「手芸」とみなされ、工芸やアートとして評価されることは少ない。カマラデーヴィーが政府の政策のなかで、家庭内で家族のために刺繍を行ってきた女性たちを、男性の専門職人と同様に、「職人 (craft person)」として位置づけた意義は大きい。その結果、彼女たちの技術が正當に評価されるとともに、支援の対象として認識されることになった (cf. 金谷 2008a: 82-91)。

一九五二年には、手工芸開発の計画を立案するための機関として、全インド手工芸局 (All Indian Handicraft Board) が設立され、初代長官 (Chairman) にカマラデー

ヴィーが就任した。彼女は、最初の仕事として全国をまわり、「手工芸」の発見と職人たちの状況の調査を行った。

この当時、カマラデーヴィーは、現地の役人も行きたがらないような遠隔地にも自ら赴き、直接生産者と接することを大切にしよう (Sarat 1991: 24 cited in 金谷 2007)。

また、手工芸の仕事に関わる人々、中核の幹部からデザイナー、買いつけ係、売り子など、すべての人々が現場に足を運んで職人の技術や伝統的な美を学び、それを現代の市場に対応できる形に開発するという手法を築きあげた。

手工芸開発の具体的な施策のうち、マーケティングと並んでとくに重要だったのは、デザイン開発である (金谷 2007: 32)。カマラデーヴィーはデザインを工芸の動脈とよび、新しいデザインの開発に力をそそいだ。しかし、あくまで新しいデザインはインド文化や生活に沿ったものであらねばならないとし、伝統をいかしつつ、都市化された生活の用途にあったものを開発することを重視した。

一九五六年から、全インド手工芸局は全国の主要産地にデザインセンター (Regional Design Centre) を設置し、各地に残る伝統的なデザインや染織技術の調査、新たなデザインの開発、またその成果の職人への還元に努めた。他にも、インド各地の手工芸品や染織品を公開するための国立手工芸・手織博物館 (National Museum of Handicrafts & Handlooms 通称 Craft Museum)、手袖手織布・村落産業

委員会 (Khadi & Village Industries Commission)、国立デザイン研究所 (National Institute of Design) など、手工芸開発の基盤となった機関の多くがこの時期に設立された(表1を参照)。

しかし、一九六七年にカマラデーヴィーは突如、全インド手工芸局を去ることになった。一九六六年に首相に就任したインディラ・ガンディーとの不仲が原因であったといわれる。カマラデーヴィーは、古くからネルーと親交があり、彼に対してはつきり物が言える数少ない人物だった。ネルーが健在であった頃、カマラデーヴィーの仕事に対して、彼の娘インディラがさまざまな口出しをすることをやめさせてほしいと、ネルーに手紙を書いたことがある。それをインディラは、後々まで快く思っていなかったといわれている。

第二期にあたる一九六九年から一九八九年までは、カマラデーヴィーに代わって、プーブル・ジャヤカールが、政府の手工芸開発を主導した。プーブル・ジャヤカールは、ビハール州マドゥバニ地方の民画(ミティラー画)の発見者として知られる。地震の被災地を視察に訪れて、倒壊した家屋の壁に描かれた民画を見つけ、女性たちが紙に描くように支援した (Menezes 1997 cited in 金谷 2007: 50)。

彼女はインディラの親しい友人であったため、インディラが首相の座につくと、彼女自身も政治力を増し、さまざま

な開発政策を実行していった。なかでも、職工センター (Weavers Center) を各地に設立し、手織物産地の復興につとめたことが知られている。全インド手工芸局を、全インド手工芸手織局 (All Indian Handicrafts & Handlooms Board) とし、それぞれ手工芸と手織の部門に分割した。また、手工芸の海外展開を進めたことを彼女の功績としてあげることができる。一九六八年に手工芸・手織輸出公社 (Handicrafts & Handlooms Export Corporation) を設立し、インド手工芸の海外への輸出に力をいれた。また、ニューヨークやパリにはインド手工芸の直売店 (Sona Shop) がつくられた。

さらに、海外市場の開拓とならんで、第二期において重要なのは、インディラ・ガンディーの文化外交のなかで、イギリス、アメリカ、フランス、日本で、インド祭が開催され、手工芸と手織の展覧会が開催されたことである。これらの展覧会は大きな成功をおさめ、関係者たちはインドの手工芸に対し自信を持つとともに、宣伝効果も非常に高かったといわれている。アメリカのスミソニアン博物館で開かれた手工芸展「黄金の目 (Golden Eyes)」を指揮監督したラジーヴ・セーティー (Rajiv Sethi) は、インド手工芸の伝統が、建築やデザインと同様に、現代の創造性をささえる強力な表現様式として位置づけられたと述べている (Sethi 2005)。このような海外における展覧会の経

表1 インド手工芸開発の変遷

歴史的背景		インド手工芸開発の歴史	バシンの活動
1600	東インド会社の設立 インド産手織布が貴重な交易品となる		
1858	イギリス直轄支配 インドをイギリス製品の市場として位置づけ、インド国内の織物産業の発展を阻止。本国でインドのデザインを取り入れた機械布を生産	1851 ロンドン万国博覧会でインド染織品が紹介され、好評を得る	
1920	インドにおけるナショナリスムの高まり	1878 パリ万国博覧会において、インド染織品のデザインや職人の技が高く評価される 1978 ジョージ・ソートウッド「インド宮廷ハンドブック」 1879 ウイリアム・モリス「民衆の芸術」 1909 クレーマスマーミー「インドの職人」 1920 独立運動の象徴としてM.カーンデイーが手織・手織の布「カーデイー」を採用	1940 ラージャスターン州バトワールで生まれる
1930	大規模な反英闘争		
1943	ベンガル飢饉。農業労働者と職人の餓死	1947 カラチデーイーを代表とする協同組合(Indian Co-operative Union)の設立。協同組合は難民女性の刺繍品を商品化、販売に成功 1948 政府は困窮する職人たちの支援を目的として、中央家内産業公社の直営店(Central Cottage Industries Emporium)を設立	
1947	インド分離独立。西パキスタンから難民流入		
1951	第1次5カ年計画(小規模産業に排他的生産領域の確保と優先的原料供給、大規模産業への課税)	1952 政府の手工芸政策を決定する最高機関、全インド手工芸局(All Indian Handicrafts Board)設立。カラチデーイーが初代長官に就任(〜1967)	

歴史的背景	インド手工芸開発の歴史	バシンの活動
1956 第2次五年計画(重化学工業に重点的予算配分、伝統的村落産業から近代的小規模工業へ支援の重心が移行) 1962 中印戦争 1964 ネルールの死。ジャヤスリーが首相に就任 1965 新農業戦略の導入 1966 インディラ・ガーンディー首相に就任。デサイや長老派と対立 1969 第3次五年計画の延期(1966～1968) 各地で農村の不穏が高まる 1971 総選挙。インディラの圧勝 ベンガラデシユからの難民流入。ナサライトや共産党の活動激化	1954 全インド手工芸局による手工芸調査。 1956 「手工芸」の発見と「職人」の状況把握 各地にデザインセンター (Regional Design Center) の設置が始まる。デザインの考案や職人への提携を行う 1956 国立手工芸・手織博物館 (National Handicrafts and Handlooms Museum) 設立 1958 カーデイトと農村産業委員会(Khadi & Village Industries Commission) 設置 1961 手工芸に関する大規模な国勢調査の実施 1961 国立デザイン研究所 (National Institute of Design)、アーメダバードに設立 1965 国家による手工芸職人への褒賞(National Award for Master Craftmen) 制度の開始 1967 カマラデーヴァー、全インド手工芸局を去る 1969 プーヅル・ジャヤカールによって、インド手工芸・手織輸出公社(Handicrafts & Handlooms Export Corpn. of India) 設立。海外への輸出に力を入れる。直売店(Sona Shop)がニューヨークやパリにつくられる 1972 自営女性のためのNGO組織(Self Employed Women's Association)、通称SEWAがワジャラート(アーメダーバード)に設立。手工芸に従事する女性の組合化始まる	1963 Indian Armyの将校(～1968) 1969 インド警察官僚(～1974)

歴史的背景	インド手工芸開発の歴史	バシンの活動
1974 ジャヤプラカー・ジュナヤンの運動	1973 グジャラート州手工芸・手織開発公社 (Gujarat State Handicrafts Devp. Corpn, Ahmadabad) 設立	1973 カッチ地方の早魃の視察
1975 グジャラート州選挙で会議派敗退。人民党連立の勝利→非常事態宣言	1974 シュルージャス民俗博物館 (Shreyas Folk Museum), テーマター・ハーバートに開設	1974 グジャラート州手工芸開発公社の常務取締役 (Managing Director) に就任 (～1979) 品質管理やデザインの考案、販売経路の確保などを通して、グジャラート各地の職人を支援 職人に出店の機会を提供 (後のデヴィン・ハーバートのアイデアのもとになる)
1975 国際婦人年	1975 全インド手工芸局は手工芸部門と手織部門に分割。手工芸開発弁務官庁 (Office of Development Commissioner for Handicrafts) と手織開発弁務官庁 (Office of Development Commissioner for Handlooms) の設置 手織物の振興のため、全国各地に職工・サービス・センター (Weaver Service Center) が設置	1975 カッチ手工芸展覧会をテーマター・ハーバートで開催。 テューラル・ジャヤカールの目こまり、翌年テューで開催 初めて海外に職人 (人形師) を派遣
1977 総選挙。ジャナタ党の勝利。初の反会議派政府誕生。村落と小規模セクターを重視した産業政策の提示	1976 カマラデーヴィーによって、インド手工芸参事会 (Craft Council of India)、マドラスに設立	1976 初めて海外に職人 (人形師) を派遣
1979 国際子ども年	1979 『おもちゃの不思議な世界 (Magic World of Toys)』展の開催 1979 大きな銅釜の博物館 (Vishala Utensil Museum)、テーマター・ハーバートに開設	1978 国際子ども年にあわせて、グジャラートのゆりかごなど、赤ちゃん用品やおもちゃを収集 1979 インド中央家内産業公社の常務取締役就任 (～1984) 1979 全インド手工芸局のメンバー (～1981)
1980 インドイラ・ガーンジー首相、2度目の就任 (～1984)。積極的な文化外交を展開	1982 イギリスにおけるインド祭の開催『アディティ (Aditi)』 『織工の名匠たち (The Master Weavers)』	1982 イギリスにおけるインド祭、アディティ展の実行委員 1982 国立手工芸・手織博物館の執行委員会メンバー (～1984)

歴史的背景	インド手工芸開発の歴史	バシンの活動
1984 ラジーブ・ガーンジー首相就任。	1984 インド国立芸術文化遺産(トラスT Indian National Trust for Art and Cultural Heritage)設立	1984 ヨーロッパ諸国へのインド経済使節のアトザイザー(～1987)。西ヨーロッパにおいて、インドのカーペット、染織品、手工芸の販売促進と市場調査に従事
1985 第7次五年計画(職人の技と芸術遺産の保全の重要性を指摘)	1985 フランスにおけるインド祭(～1986) 1985 アメリカにおけるインド祭(～1986)、『ザ・グールド・アイ』『黄金の目(The Golden Eye)』。職人による実演販売の実施 1986 国立フッショニ技術研究所(National Institute of Fasion Tecnology)設立	1985 京都で開催された世界工芸評議会(World Craft Council)の会議に出席のため来日
1989 V.P.Singh率いる反会議派政権樹立。マンドラ ルとマンドラ、コミュニケーション問題噴出 1991 ナラシンハ・ラオ会議派政権奪取。自由化への 転換	1988 日本におけるインド祭「インドの民芸」、インド染織を用いた森花恵によるフッショニショー開催	1987 インド手織・手工芸輸出公社のバンブルグ支店、 総括管理者(～1989) 1990 中央家内産業公社とインド手織・手工芸輸出公社の総裁を兼任(～1994)。政府の手工芸政策形成への参入、職人の技術や文化を重視したマンドラ・フッショニ戦略を実施。海外のデザイナーがインドで行うデザイン・プロジェクトを企画・後援し、多くの専門家を海外から受け入れる 1994 NGOアソシエーション代表(～2001)。国家賞を受賞した職人を促進する活動に力を入れる
1996 B.J.P.統一左派連立政権樹立	1994 デザイン・ハート(手工芸マンドラ)の開設。 職人がマンドラ・フッショニを学び生産者から起業家になるための支援 1995 中央家内産業公社の直営店売り場拡大 2001 国立染織デザインセンター(National Center for Textile Design)設置	1995 インド工芸評議会の議長を2期つとめる(～2000)
2004 マンモハンシン首相就任	2007 デリー-北西部(Pitampura)に2つめのデザイン・ハートが開設	2003 NGO・バサナ代表 2007 個人コレクションを展示するギャラリー「ハート」をジャイプルに開設 2008 『インド刺繍布のきらめき』展が日本の国立民族学博物館で開催

験をへて、一九八五年頃からインドの手工芸は、建築や芸術と並ぶひとつのユニークな文化遺産であるという認識がうまれてきた。一九八四年には、ラジーブ・ガンディーの名前のもとに、インド国立芸術文化遺産トラスト (Indian National Trust for Art and Cultural Heritage) が設立され、プーブル・ジャヤカールが初代代表 (Chairman) に就任した。この団体の設立自体が、そしてその代表に「手工芸の女王」が就いたことから、八〇年代後半において、手工芸振興の目的が職人の生活支援から、国のクラフツマンシップと芸術遺産の保全へと完全にシフトしたことをよく表している。

手工芸開発の第三期は、一九九〇年にブリッジ・プージャン・バシンが政府の二大組織を率いることになった頃に始まる。彼は政府の官僚であり、一九七〇年代初頭のグジャラートで手工芸開発におけるキャリアをスタートさせた。この分野で仕事をするきっかけとなったのは、彼が警察官僚 (P.S.) としてグジャラート州知事^{*}の補佐官 (Aide de Camp) をつとめていたときのことである。ひどい旱魃におそわれたカッチ地方の村々の視察において、女性たちが困窮状態のなかで大切な刺繍品をごく僅かなお金で売り払っている状況を目にした。その刺繍の美しさに魅せられると同時に、彼は強い憤りを感じたという。何か自分のできることはないかと、手工芸開発の分野で働くことを強く

希望し、一九七四年にグジャラート州手工芸開発公社のダイレクターに就任した (cf. 中谷 2008: 92-95)。

一九七〇年代初めのカッチは、まだほとんど外部の人には知られていない未踏の地だった。「手工芸」という概念自体がまだ知られておらず、バシンが最初に行った仕事は、カマラデーヴィーと同様に各地に出かけて作り手を探しだし、その仕事を奨励することであった。バシンと職人たちの出会いについての興味深いエピソードが、いくつも聞き取り調査から明らかになっている (cf. 金谷 2008b: 100-107)。バシンは、貧しさのなかで手放される刺繍布やその他の手工芸品を適切な価格で購入するとともに、女性や職人が手仕事をつづけていくための支援をした。また、有能なスタッフを雇い、彼らとともに村々をまわり、作り手に良質な原材料を提供して質の高い商品を作らせたり、デザインを指導したりするなど、職人の伝統技術に裏打ちされた新しい製品を開発していった。そうして開発されたモノの販売に全責任を持つというのが彼の方針であり、この地域の職人たちにとって、彼の会社は新しいパトロンの役割をはたしたといえる。数年のうちにグジャラート州手工芸開発公社の店舗、ゲルジャリー^{*}は全インドでも最も注目されるほどに発展した。

バシンの能力に目をつけたのは、全インドの手工芸開発を率いていたプーブル・ジャヤカールである。一九七九年

にバシンは中央政府に呼ばれ、中央家内産業公社の常務取締役 (Managing Director) に就任する。全インド手工芸手織局のメンバーにもなり、政府のポリシー・マーケティングに参加するようになった。その後、バシンは手工芸の海外市場の開拓に力をいれていたジャヤカールの右腕として、一九八四年から六年間ヨーロッパに派遣された。一九九〇年にバシンはインドにもどり、中央家内産業公社、及び、手工芸・手織輸出公社のトップ (Chairman & Director) に就任した。彼は手工芸開発に関わる政府役人の最高の地位にたどり着いたといえる。

手工芸開発の第三期の始まりを、筆者はバシンが手工芸開発を率いるようになったこの年に設定したが、この時期の特徴として、一九八五年頃から生まれてきた保全の対象としての手工芸「品」、インドのユニークな文化遺産としての手工芸「品」という認識が、さまざまな弊害を手工芸開発の現場にもたらしていたことがある。バシンは定年までまだ一〇年以上残されていたにもかかわらず、わずかに四年間でこのポジションを辞任した。その理由を彼はあまり多く語らないが、伝統技術を持った個々の職人ではなく、彼らの作った「モノ」が注目されるようになり、手工芸開発にたずさわる人々が現場で職人と向き合い、彼らの創造性や技術を尊重しながら、新しいデザインを開発していくという手法自体が顧みられなくなっていた。その結果、手

工芸品の著しい質の低下がおきていた。また、政府直営のさまざまな店舗では、ほとんどの商品を生産者から直接買い取るのではなく、間に商人が介入して利益をあげるようになっていた。バシンはこうした問題に真っ向から立ち向かい、開発すべきは「モノ」でなく、「人」であるという彼の信念をつらぬこうとしたが、大きな組織のトップである彼に対して、ねたみや妨害がたくさんあったという。この時期に海外展開していた政府直営店がすべて閉鎖されていることから、インド政府の手工芸開発はひとつの壁につきあたっていたと考えられる。

バシンは一九九四年に官職を辞任し、両公社の責任者の座を退いた。その後は、自らNGOを組織して手工芸開発に携わるようになった。活動の場をNGOに求めた積極的な理由として、国内マーケットの強化に力を入れたかったと、彼は後に述べている。この当時、インドの手工芸品の需要は海外マーケットに主に依存しており、九〇年代にはいっても、政府の政策はいかかわらず輸出志向だった。バシンは国内需要が強化されないかぎり、手工芸市場の伸びが長続きすることはないと考え、また国内向けの商品においてこそ職人たちの創造性や技術をよりいかにすることができると考えた。

バシンがNGOに移ってから現在までは、手工芸開発の歴史の第三期後半として捉えられる。というのは、手工芸

振興にかんする政府の方針は、大枠としてほとんど変化していないように見える一方、この時期には、中間層の成長とともに国内需要が目立って拡大した[※]。一九九五年に中央家内産業公社のエンポリウムが広大な売り場面積を持つ大きなビルに移転したことも、国内市場の拡大と関係があるように思われる。また、デリーの中心部商業地区にあるディッリー・ハート(Dilli Haat)という手工芸マーケットは、訪れる人の数が年々ふえており、二〇〇七年には第二のディッリー・ハートが北西部の住宅街(Pitampura)にオープンした。中心部からは遠く、外国人観光客などほとんど訪れない場所であるにもかかわらず、中心部のディッリー・ハート以上の盛況ぶりであると聞く。これらの事実[※]は、手工芸の消費者が国内にも確実に育っており、かつ年々増加していることを表している。

さらに近年の特徴として、モノを生産することに対する人々の認識、インダストリーという語が持つ意味や定義に変化がおきている。かつて手工芸や手織は、どちらかといえば品質管理されていない「やぼったい」ものとして、家内産業(Cottage Industry)や村落産業(Village Industry)は、組織化されていないという謙遜めいた意味で用いられていたのに対し、ポスト産業社会においては、規格化されていないこと、均質的でないこと、集中化していないことが逆に強みとなり、手工芸は人間の創造性や技

術が重要性を占める、脱集中化創造的産業(Decentralized Creative Industry)という新しい名称を獲得した。ジャヤ・ジャイトリー(Jaya Jaitry)は、「産業としての手工芸」いう論文において、二〇〇〇年から二〇〇五年までの五年間の手工芸品の輸出額の伸びを数字で示しながら、「もはや手工芸はバトロネッジや過度にロマン化された見方や弁解めいた支援の対象ではなく、経済という歯車を回転させる産業として注目に値する」と述べている。また、手工芸産業と観光産業との強い結びつきや、お茶やスパイスといった農産物、時計やモバイルなどさまざまな商品のパッケージに、エコ・フレンドリーなりサイクル技術をイメージさせる職人たちの伝統技術をいかすことができると指摘している(Jaitry 2005)。

このように手工芸産業に大きな可能性をみる見方は、現在、手工芸の振興に携わっている多くの人々に共通するものである。しかし、その一方で、手工芸がうむ利益をその生産者が享受していないという深刻な問題がおきている。商人に独占されて原材料が生産者の手に入りにくくなっている問題や、グローバル市場にアクセスするためには、商人やNGOや輸出業者に頼らざるをえないという問題を生産者は抱えている。国内市場の成長をしめす例として、近年人気が高まっている手工芸マーケット、ディッリー・ハートについて述べたが、「ハート」とはもともと農産物

や手工芸品を村々の生産者が自由にもちよって販売する伝統的な定期市を指す。ディッリー・ハートは、国の中心部で観光客や都市住民を客に、各地の手工芸職人たちが、直接商品を販売するための場所として一九九四年に設立された。職人が直接商品を販売することを通して、マーケティングの手法を学び、消費者の好みを知り、より良い製品の生産にいかすことができるようにという考え方にもとづいている。よって、全国各地から職人が参加できるよう、一人の手工芸職人は一日間しか店を開くことができないというルールがある。また、一度、店を開くと三ヶ月間は場所を予約することができない。しかし、実際は店を出している者の多くが商人で、両親や兄弟や親戚などの名前をつかい、継続して場所を占有するというのが見られる。これは、商人による手工芸産業の支配のひとつの例にすぎない。職人たちが手工芸の単なる生産者ではなく、自ら販売も手がける職人 (Artisan-merchant) へと成長するのをどのように支援するかが、現在、政府やNGOにつきつけられた大きな課題である。

V おわりに

本稿では、まずⅡにおいて独立以前の社会における「職

人」について述べた。歴史を通して明らかになったのは、「職人」の多様性と包摂性である。村落を基盤にジャジマールー関係のなかで生産している職人のなかには、同時に交易品の生産にも従事している者もあり、彼らは地域をこえた大きな交易ネットワークに含まれていた。また、モノの生産と交易の両方を統括する、移動性の高い「職人商人」が大きな権力を持っていたことは、インドを本質的に農業社会とみなす視点に再考をせまるものである。これらの点で、「職人」はインド社会研究に多くの視座をもたらすものであるが、独立以降の手工芸開発との関連で、とくに重要であるのは、こうした「職人」の多様性と包摂性ゆえに、手工芸開発の対象となる人々が明確ではなく、本来の目的からずれてしまうことや、政策自体の変化がたやすくおきてしまったことである。

たとえば、独立直後の第一次五カ年計画において規定された村落産業の振興政策は、先に述べたように、近代化によって生計手段を失い、農村部にとりのこされた職人への支援策として始まった。そこにはガンディー主義的な理想が込められており、西洋の文化に対置する、あるいは優越するインド独自の文化や価値観の構築という意味もあった。しかし、実際に小規模産業政策の主な対象となったのは、機械化された小規模工場である。織物産業というなら、手機職人ではなく、機械織工場 (パワールーム) の経営者

であった。このような状況下で、カマラデーヴィーは、手工芸の振興には小規模産業として知られるものとは異なる活動が必要であると認識し、全インド手工芸局を設立した(Narasimhan 1999: 81)。つまり、一九五二年の全インド手工芸局の設立は、手工芸セクターを政府が経済計画全体のなかで重視していたというよりも、むしろ軽視していたことの表れとして理解されなければならない。

しかしながら、インド各地で廃れていた手仕事を見つけ出し、職人とともに伝統技術をいかしたデザインを考案し、次々に「伝統的」手工芸を復興させていったカマラデーヴィーの仕事は、職人の生活支援の範囲をはるかに超えて、彼らの手仕事への誇りを培い、伝統技術の継承を図るものであった。カマラデーヴィーは、自伝のなかで、ガンデーとの関わりを通して、手工芸とともに暮らすこと、手工芸が我々の存在の一部であることがどれほど有益かを理解するようになったとし、モノが周囲に吹き込む穏やかな感覚の尊さを経験したと述べている(Chattopadhyay 1986: 67)。彼女が独立直後から一九六〇年代後半まで、政府の手工芸開発を率いたことで、近代化路線の開発政策からこぼれおちる人々の救済という、政府が手工芸開発に期待した以上の役割を果たしたといえるのではないだろうか。

次に手工芸開発を担ったブーブル・ジャヤカールの時代

には、インドの文化遺産として手工芸の魅力を海外に発信していくことが中心課題となる。第二期の海外展開が可能になったのは、第一期に職人の状況や手工芸について詳細な調査が行われていたことが大きい。ジャヤカールは、なかでも高い技術力を持つ手織(Handlooms)の振興に力をそそぎ、海外におけるインド祭の開催を追い風に、手工芸にインドの文化遺産としての価値を付与することに成功した。政府の手工芸開発は、失業対策の枠組みから完全に離陸したといえるだろう。第二期の手工芸開発の受益者となった者には、工房の親方などが多い。彼らは手工芸開発を通して、海外マーケットに直接つながることができた。たとえば、インド祭において、手工芸の展示即売(デモンストレーション)が行われた。そこに参加する機会を得た職人は、海外の消費者に直接商品を売ること、彼らの好みを知り、それに合わせた商品を開発するという能力を徐々に身につけていった。

第三期前半に政府の手工芸開発を率いたバシンは、カマラデーヴィーの崇拜者であると彼自身が語っているように、職人の生活上という社会開発の側面をできるかぎり重視したいと考えてきた人物である。しかし、上述したように彼が中央政府の主要ポジションにいた一九九〇年代は、手工芸「品」への高い評価とは裏腹に、「職人」が顧みられなくなっていた。インドの手工芸開発がその出発点

から抱えてきた二つの課題、職人の支援と文化遺産の保護とが噛み合わなくなった、あるいは両者の対立が表面化した時期といえるかもしれない。こうした難しい時代に両輪のバランスをとりながら手工芸開発を進めようとバシンは奮闘した。このような彼の仕事の特徴について最後に述べ、結びとする。

バシンの仕事の特徴の第一点に、彼が非常にすぐれた美的センス、本物をみる目を備えている人物であったことがある。それは彼の生い立ちからも推測できる。彼の父は独立前のバトブル藩王国で、藩王の大医をつとめていた。このため宮廷でダンスや歌のセッションを、王がしばしば訪れたマトウラーやヴリンダーヴァンで、ラースリーラーやキールタンといった優れた芸術を、鑑賞する機会に恵まれていた。また、男の子であるにもかかわらず、刺繍や編み物などに小さい頃から非常に興味があり、叔母にならってたくさんのものを作ったという。彼の美的センスは、手工芸開発において新しいデザインを生み出すときにいかになく発揮されただけでなく、彼が職人への尊敬の心をもちつづけた背景に、美を感じ、尊ぶ心が彼自身に宿っていたことが大きい。

第二点として、彼は有能な官僚であった。適材適所に部下を配置し、彼らの能力を最大限にいかして、会社の売り上げをあげていくという彼のマネージング能力の高さは、

たとえば、設立されたばかりのグジャラート州手工芸開発公社のエンポリウムを、数年のうちにインドで最も成功したエンポリウムに成長させたことから明らかである。また、その当時に彼は手工芸開発にたずさわる多くの人材を育てた。現在、政府やNGOなどのさまざまな機関を代表するようになっている人のなかに、一九七〇年代にバシンとともにグジャラート州手工芸開発公社で仕事をしたという人がたくさんいる。こうした彼の官僚としての能力は、これまでも高く評価されてきた。しかし、大事な点は、管理能力だけでは、伝統的な技術を尊重しながら、新しい商品を開発するという手工芸開発のむずかしさ、手工芸本来の持つ美的価値をそこなわずに現代の市場にマッチするものを作るといふ、一種の離れ業を成功させることはできなかったと思われる。そこにはやはり彼のモノをみる目、モノをみる心が大きな役割を果たしていた。

第三点として、彼の信念も非常に重要である。手工芸が開発されるなかで、まったく別のモノに形をかえてしまふことについて、「手仕事の魅力が失われてしまわないか？」という金谷の質問に対し、「技術は職人の身体に埋め込まれています。ですから、手工芸の技術を残そうとするなら、職人が手工芸で食べていける道をつくらなければならぬのです」と、彼は明快に答えている（中谷・金谷2008）。この言葉には、価値があるのは手工芸品自体ではなく、人

であるという彼の信念が表れている。バシンは考えたり、書いたりする人でなく、常に思ったことをすぐに実行する人であった。彼はインドでおそらく最も早く、職人たちが都市の人々に直接販売する機会を提供した。ゲジャラートにいた頃、自分が住んでいた政府公舎の庭を土曜日と日曜日の朝に、村々の職人たちがあつまって手工芸品を販売できるように開放したという。一九七四―七五年頃に彼の家の庭で開いていたこの市のアイデアがもたくなって、当時、彼のスタッフであったジャヤ・ジャイトリーによって、一九九四年にディッリー・ハートが設立された。また、一九七六年に海外に初めて職人を派遣したのも彼である。

それはバシンと一人の人形師との出会いから始まった。実際に、職人が手仕事を見せながら、直接商品を販売する「デモンストレーション」(展示販売)も、バシンが考案したという。一九八五年にアメリカのインド祭で試みられた後に、インド内外のさまざまな展覧会の場で行われるようになったという。

こうして彼の仕事をふりかえると、彼が「伝統工芸」そのものではなく、その「作り手」を開発の対象とし、彼らと常にむきあっていたことがわかる。その一方で、職人を保護や援助の対象とみなすのではなく、手工芸品の市場開拓を最重要視していたこと、現在では開発の王道となっている手法を一九七〇年代から一貫して実行してきたことが

重要である。つまり、彼という人物によってこそ、職人の支援と文化遺産の保護という二つの課題のバランスが保たれてきたといえるかもしれない。もともと、それも一九九〇年代初頭までのことであり、そうした理想が、政府のなかで受け入れられなくなったことが、彼の辞任の理由であったと考えることができる。手工芸の未来をNGOに託し、官僚の地位をなげすめてバシンの選択の背景には、かつて政府に期待されていた社会開発の役割を、近年はNGOが担うようになっていいることがあると思われる。

●注

*1 本稿では、インド政府の手工芸開発について独立直後から一九九〇年代初頭までをとりあげる。なぜなら、それ以降の時代になると、経済自由化によって民間資本が手工芸分野にも流入し、また、さまざまなNGOが手工芸開発の分野で活躍するようになったことにより、手工芸にかかわるアクターが著しく増えた。政府の役割が相対的に小さくなっており、政府の政策に注目する意味も薄れていると考えられる。

*2 バシンは、インド行政官(IAS)として一九七四年から一九九四年まで、手工芸開発に関わる政府ポストを歴任した。官職を辞任後、NGOを組織して手工芸の振興に取り組んできた。現在はNGOバルサナの代表をつとめる。筆者は一九九一年からバシンと親交があり、彼の仕事を見聞きする機会に恵まれてきた。また、二〇〇六年から二〇〇七年にかけて、金谷とともにバシンが収集したインド西部地方の刺繍

布（バシン・コレクション）を調査した。その後、国立民族学博物館に彼のコレクションを紹介し、二〇〇八年に「インド刺繍布のきらめき」展の開催に尽力した。バシン・コレクションやバシン氏についての詳細は、三尾他（2008）を参照。

*3 職人組合は、契約で結ばれた専門家集団であり、徒弟制度をもち、技術の基準を設けることで新参者をコントロールしていた。工芸品の質を重視する商業倫理をもち、公正な賃金や価格を維持していた。組合は共同資本をもち、国家による公共事業を実施する組織としての機能も持っていた。組合員間の契約がお互いの信頼関係を築くために不可欠であり、どんな仕事の前にも交された。契約違反や不正な行為をしたメンバーは罰金を科された。こうした収入が共同資本となつて、大きな融資を可能にしていた。組合は必ずしも地縁とは結びついておらず、ひとつの町から別の町へと移動したことが知られている。興味深いことに、しばしば商人と職人の組合はひとつの合同組織、商工会議所に類似する組織をつくっていた。なかには遠隔地への輸出業者を含んでいる組合もあった（Strui 1995: 6）。

*4 タミルでは、農業カーストを中心に彼らに依存するカーストを含む集団は「右手集団」、職人商人カーストを中心として彼らに依存するカーストを含む集団は「左手集団」とよばれ、両者は国家や寺院や植民地政府から与えられる地位や権限をめぐって対抗してきた。

*5 中央家内産業公社（通称 C C I C）は、設立時の一九四七年には商産業省（Ministry of Commerce & Industry）の管轄にあり、一九五五年に生産省（Ministry of Pro-

duction）に移った。その後、織物省（Ministry of Textile）の管轄になった（金谷 2007: 50）。

*6 バシンが当時仕えていたグジャラート州知事は、シュリマーン・ナラヤン（Shriman Narayan）である。彼は有名なガンディアンとして知られている。

*7 中央家内産業公社の場合、二〇〇八年の時点で売り上げの四割を海外が、六割を国内が占めるまでになっている。この数字は、二〇〇八年当時に中央家内産業公社の最高責任者（Chairman）の任にあったナンダ（Gushan Nanda）へのインタビューにもとづく。

*8 カマラデーヴィーは、職人が自らの技術に誇りをもち、それを継承していくことができるように、優れた職人のための国家による褒賞制度（National Award for Master Craftsmen）を一九六五年にもうけた。全国から州単位で公募された職人のうちから選定され、デリーで行われる授賞式において、優れた手工芸従事者は、賞金と賞状と盾がもらえる。そのほか、褒賞者は海外を含めた各種の手工芸祭への招待、年金の特典があるほか、手工芸の技術訓練クラス事業を利用することができる（金谷 2007）。

●参考文献

金谷美和（2007）『布がつくる社会関係——インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』思文閣出版。
金谷美和（2008a）『女性職人への支援』三尾稔他編『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクションに見る手仕事の世界』昭和堂、八七—九一頁。

金谷美和 (2008b) 「バシン氏と職人のかかわり」三尾稔他編『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクションに見る手仕事の世界』昭和堂、一〇〇—一〇七頁。

中谷純江 (2008) 「インド手工芸の支え手、バシン氏とバシン・コレクション」三尾稔他編『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクションに見る手仕事の世界』昭和堂、九二—九五頁。

中谷純江・金谷美和 (2008) 「バシン氏の仕事を振り返って」三尾稔他編『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクションに見る手仕事の世界』昭和堂、一一二—一一五頁。

三尾稔・金谷美和・中谷純江編 (2008) 『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクションに見る手仕事の世界』昭和堂。

柳沢悠 (1992) 「植民地支配期南インドの手織業とその消費構造」『東洋文化研究所紀要』一一八、六五—一一七頁。

Alaev, L. (1984) Non-Agricultural Production, South India. in Raychaudhuri and Habib (eds), *The Cambridge Economic History of India*. vol.1. Hyderabad: Orient Longman.

Chattopadhyay, Kamaladevi (1986) *Inner Recesses, Outer Spaces: Memoirs*. New Delhi: Navrang.

Hall, Kenneth R. (1980) *Trade and Statecraft in the Age of the Coolies*. New Delhi: Abhinav Publications.

Jain, L.C. (2003) Kamaladevi Chattopadhyay: My Long Journey with her in the Realm of Handicrafts. Rao, M.V. Narayana (ed.), *Kamaladevi Chattopadhyay: A True Karmayogi*. Bangalore: Crafts Council of Karnataka, pp. 1-6.

Jaitly, Jaya (2005) Crafts as Industry. in *Seminar* 553, *Creative*

Industries: A Symposium on Culture based Development Strategies.

Menezes, Saria (1997) India's Eager Weaver: Pupil Jayalar Sensitized Generations to India's Timeless Traditions. *Outlook* April 9, 1997.

Mines, Mattison (1984) *The Warrior Merchants: Textiles, Trade, and Territory in South India*. Cambridge: Cambridge University Press.

Narasimhan, Sakuntala (1999) *Kamaladevi Chattopadhyay: The Romantic Rebel*. New Delhi: Sterling Publishers Pvt. Ltd.

Panandiker, V.A. and Sud, A. (1986) *Rural Industrialisation*. New Delhi: Oxford & IBH Publishing.

Ray, Himanshu Prabha (n.d.) Artisans in Ancient India. Unpublished paper written for Sruti (1995).

Saraf, D.N. (1991) *In the Journey of Craft Development 1941-1991*. New Delhi: Sampark.

Sethi, Rajiv (2005) Toward a National Policy. in *Seminar* 553, *Creative Industries: A Symposium on Culture based Development Strategies*.

Specker, Konrad (1989) Madras Handlooms in the Nineteenth Century. *Indian Economic and Social History Review* 26: 131-166.

Sruti (1995) *India's Artisans: A Status Report*. New Delhi: Sruti.

(なかに・すみえ／鹿児島大学)